

近代の文芸雑誌(三) (資料紹介)

(4) 近代 詩歌

ごくおおざっぱに言って、一九二〇年代は日本文壇の転形期であった。詩壇でも前衛詩の運動が起こったり、詩話会が解散されたりで、この年代は多端の時期であった。おびただしい数の雑誌の興亡がそこに見られたが、その一つをここで取りあげることにする。まず、創刊号の目次を紹介しよう。

幸福 (詩)	中西 悟堂 一二
へっぽこ楽隊 (詩)	大関 五郎 一三
駆けぬけた涼風 (詩)	神戸 雄一 二〇
訪れてくる春 (詩)	村井 武生 二二
木 (詩)	黄 瀛 二二
罪な桃の花 (詩)	角田 竹夫 二六

乙 骨 明 夫

女と俺 (詩)	田辺 若男 二七
フランス・ジャム詩章 (訳詩)	前田鉄之助 二八
幻夢 (訳詩)	宮川 靖 二九
雪どけの日 (詩)	宮崎紗久子 三〇
巷の遠景他一篇 (詩)	清水 俊雄 三〇
鯉他一篇 (詩)	銜 泰 三一
郊外 (短歌)	並樹 秋人 三八
温室 (短歌)	飯島 貞 三九
現代自選詩集合評	二
詩的精神の存在	赤松 月船 一四
詩壇刺ある言葉	大壘 勇次 一七
詩月評	渡辺 渡 三四
処女作当時の回想	
貧しい貴重	井上 康文 一八

恋愛を讚美した

詩人日記

暮の日記

早春五白

取手より

床柱に凭れて

地方詩壇

わが代表作

正富 汪洋 一九

大関 五郎 二二

岡村 二一 二五

大関 五郎 三二

飯島 貞 三三

諸 家 五二

以上が目次で、本文は六十四ページ、奥付けを見ると、大正十四年五月一日発行で、編輯兼発行者は飯島貞、印刷者は内藤銀策、発行所としては自由詩社と抒情詩社との二つがしるされている。

巻末に近く「第二編輯卓上」と題する小文がしるされているのを引いてみる。

「近代詩歌」は詩歌壇の衆議院です。そこには公園のベンチのやうに自由に諸君のために座席が用意されてゐます。

この雑誌が他の雑誌と異ふ点は、さうした意味での根本精神の上の新味とともに読者諸君の間の与論に従って、どしどし内容の形の上にも変更を続けていって、絶えず潑刺たる共同の機関としたいと心掛けてゐる点です。

詩歌がだんだん熾になつて、普遍的になつて来て、民衆の心臓の中に浸潤してゆくことは実に愉快です。現代は正に第二次の万葉時代です。かうした時代に生れて来たことは、我々のひ

としく悦びとするところであらねばならない。

兎に角「近代詩歌」がこんな祝福されて出発してゆくことは痛快です。(B生)

この短文によれば、この雑誌は、詩人歌人に自由席を提供することを目的として刊行されたかに思われる。この当時は詩話会が存在し、詩話会の機関誌「日本詩人」が毎月刊行されていたが、「日本詩人」はどんな詩人の作をもたやすくのせるといふ類の雑誌ではなかつたと思われる。詩話会は当時の詩壇での強力な存在であつただけにこれに対する風当たりも強く、赤松月船は「詩話会解散」(「読売新聞」一九二四・一〇・二三、二五、二六)を書いて詩話会を攻撃した。月船は「詩話会幹部たる川路、福田、白鳥、佐藤の跳梁と、其跳梁を快しとせずと雖も敢て起つて難詰するの勇を欠ける平会員諸君のノンセンス」を指摘し「詩話会は俗物的賤民的思想の一大象徴である」として「詩話会を解散せよ」と叫んだのである。赤松月船の攻撃を受けて詩話会幹部の川路柳虹が「詩話会を罵る人達へ」(「日本詩人」一九二四・一二)を書いたが、それに対してさらに赤松が「近代詩歌」創刊号に「詩的精神の所在」を書いたのである。その中につきのような一節がある。

内藤銀策に一言するが、君の反詩話会の運動が、詩人がそれだけの個性と実力に解放される運動であればよいが、反詩話会の詩話会などは聰明なる君の堪へがたしとする所にちがひあるまい。つまり君の言葉借りて云へば、せいせいより少し赤松月船をつくるのが君の天責であらう。

この一節を見たかぎりでは、内藤振策は詩話会に反抗する心を持っていたように思われるが、「近代詩歌」の詩の選者をしてるのが、白鳥省吾、佐藤愼之助といった詩話会の幹部であるところか見ると、この雑誌が反詩話会を旗じるしにかかげたとは思われない。

「近代詩歌」は以後月刊で刊行されたが、飯島貞が編輯兼発行者となっていたのは第三号までである。

第一巻第二号（一九二五・六）六四ページ

第一巻第三号（一九二五・七）六四ページ

までが飯島の編輯発行であるが、印刷者としての内藤振策の名は一号だけで消えている。二号と三号の印刷者は山口義孝となっていて、発行所が三号では自由詩社だけになっている。

そして

第一巻第四号（一九二五・八）五六ページ

では、編輯兼発行者が沖田滝次郎となり、印刷者はひきつづき山口義孝、発行所が近代詩社となっている。この号にはつぎのような社告のせられている。

九月号より詩壇諸星後授の下に誌面を刷新して、出発を新しくする。実跡は九月号本誌に就て見ていただきたい。其前提として今日から社名、定価振替口座番号及発行所並に編輯部の場所を左記のやうに変更した。

東京市小石川区戸崎町七十二番地

近代詩社

第四号から、沖田滝次郎、山口義孝、近代詩社という名目は変らぬままに十二月まで続く。その号数、刊行年間、ページ数をしるすつぎのようになる。

第一巻第五号（一九二五・九）五六ページ

第一巻第六号（一九二五・一〇）五九ページ

第一巻第七号（一九二五・一一）六〇ページ

第一巻第八号（一九二五・一二）六〇ページ

第二巻からは、印刷者の山口義孝のかわりに沖田実の名が登場する。そして、

第二巻第一号（一九二六・一）六一ページ

第二巻第二号（一九二六・二）五八ページ

第二巻第三号（一九二六・三）六〇ページ

第二巻第四号（一九二六・四）六一ページ

と続く。ひきつづき、一九二六年五月に第二巻第五号が刊行されたと思われるが、これは未見である。そして

第二巻第六号（一九二六・六）六七ページ

となるが、この号では編輯者が陶山篤太郎、発行者が沖田滝次郎となっている。

「近代詩歌」は第二巻第六号で終わったようである。「日本詩人」（一九二六・八）に陶山篤太郎は「近代詩歌」についてと題してつぎのやうに書いている。

僕が編輯を担当するやうになって三カ月の短期で、経済上の

問題から近代詩歌が休刊するやうになつたのは、余り突然で僕も一驚した位ですが、雑誌の経営一切の負担者である沖田氏の都合であるので止むを得ないことです。七月号はすっかり編輯をして出るつもりであつたので、この突然の休刊は、原稿を依頼した諸氏に対して大変失礼してしまつた訳です。

休刊の理由が明白に経済上の問題なので、再刊については僕に何等の名案もなく、無条件で提出するといふ経営者沖田氏の言明に対して引受けてくれる出版者でもないかぎり発行は難しいと考へてゐます。

(中略)

今後のことについては追記しますが、僕としては確実な経営背景が得られない以上この雑誌の編輯は再刊になつても辞して、食ふ道を探して当分勉強する考へです。

以上、この欄によつて、近代詩歌休刊の真相の一部を発表して寄稿家各位への通知にかへます。

「近代詩歌」はこうして、経営上の問題から休刊のやむなきに至り、そのまま再刊されずに終わったようである。

「太平洋詩人」(一九二六・九)の「編輯卓上」で渡辺渡がつぎのように書いている。

「近代詩歌」が六月きり廃刊になつたことは当然の帰趨である。詩の雑誌が営業として成り立たないことは最初から判つてゐることであつて、ただ特殊の熱情によつてのみやうやく成り立つものである。

「近代詩歌」は、当時の新進気鋭の詩人の詩を主としてのせている。白鳥省吾・佐藤惣之助・萩原朔太郎は選者であつて、自分の詩をのせていない。先輩格の詩人では、高村光太郎・野口米次郎・加藤介春・百田宗治らが少数の詩をのせているだけである。当時、詩話会編の年刊アンソロジー「日本詩集」に発表していた詩人の中では新進の尾崎喜八、勝承夫、中西悟堂、三石勝五郎、大鹿卓、平木二六、八木重吉、金子光晴、内野健児、相川俊孝らが詩を寄せ、アーキズム系の小野十三郎も詩をのせている。その他では、草野心平、北川冬彦、上田敏雄、高橋新吉も詩を書いている。

詩論では、前に述べた赤松月船の「詩的精神の存在」のほか、伊福部隆輝の「現代詩の進路に就て」(一〇三)が注目される。「日本現代詩は行き詰つてゐる」と先ず警告し、「詩といふ觀念から逃れよ」と力説するところに、筆者独自の熱意がこもつてゐる。

詩論のほかでは、詩集評が注目されよう。萩原伸二郎の「猫。青猫。萩原朔太郎」(一〇五)、小野十三郎の「白痴の夢」「夢と白骨との接吻」「腕の欠伸」批評(一一七)はともに、評論の域をこえた詩的文章であるところに味わいを持つてゐる。

一九二四年、一九二五年のころに発行された数多くの雑誌の中で、「近代詩歌」がどれほどの価値を持つていたかを定めることはむずかしい。ある程度の公器的性格を持ち、新進詩人の詩業をつたえた点にその特色が見られようか。全十四号という数は、多いといふほどではないにしても、当時では、さほど短命であつたとは思われない。「詩壇消息」創刊号(一九二七・一)にのせられた「詩壇

消息」の欄に

詩話会が解散した。「近代詩歌」がぶっ潰れた。「日本詩人」が廢刊した。詩壇は実に暗惰たる有様だ。

鶴見先生御退任によせて

江の島での鶴見会

浦野 政 江

私は一回卒ですので卒業後四年半になります。四年半経った現在でも鶴見先生とは、年一回の鶴見会と称する会でお会いできます。この鶴見会と申しますのは、在学中、近世文学の卒論を選んで先生にいろいろ御指導戴いた者達と、先生を中心としての十五、六人の会なのです。今年は七月に開かれもう五回目を迎えました。都会の慌しさの中から少し離れた江の島での会は、先生を含めた、たった五人の集りでした。このメンバーの中で、のほほんとしているのは私一人。あとの方々は、お子様もいらっしやりたいへんに奥様ぶり

としるされているから、「近代詩歌」の存在も大きかったのかもしいない。
(木学教授)

を發揮していらっしやる方々なのです。ですから私もこの会の出席は、一寸踏いも致しましたが、先生の事を考えますと何故か、事情の許す限り出席しなければ申し訳ないような気が致しました。先生はたいへん帳面な方なのです。はるばる小平から二時間半もかけて出席して下さるのかと思うと一時間足らずで行ける私なのですから出席せざるを得ない気持ちにかられるのです。わずか五人の集まりでしたが年一回の会だけあって、時間を忘れ、とうとう帰りのロマンスカーにも乗遅れてしまいました。仕方なしに急行を待っている江の島のホームで先生が私に、「少しお肥りになったようですね」と言われ、私も素直にそうなのですと答えました。どなたにお会いしてもそう言われるのは事実であって認めざるを得ない昨今なのです。何しろ一年ぶりに先生にお会いしたのですから先生のお話も伺